

活動報告書 概要版

AI セーフティ・インスティテュート
事業実証ワーキンググループ
適合性評価サブワーキンググループ

2026年4月23日

AISI Japan
AI Safety Institute

- AI分野における適切で包括的な適合性評価（AI適合性評価）の確立を目指す。
- 他のSWGと連携することにより、分野別・分野横断の縦横から包括的な評価方法を検討・開発する。

現状と課題

- 従来の適合性評価では、変化し続ける対象への評価に対応しきれない可能性がある
- 現在開発中のISO/IEC 42007（AIシステムに対する適合性評価のハイレベル・フレームワーク規格）は枠組みを定めるもの
⇒柔軟かつ適切な具体的な評価方法と実行可能手順が必要

AI適合性評価の確立への取組み方針

➤ 分野別SWGの取組みも考慮して、AI適合性評価の要件抽出
<具体的なステップ>

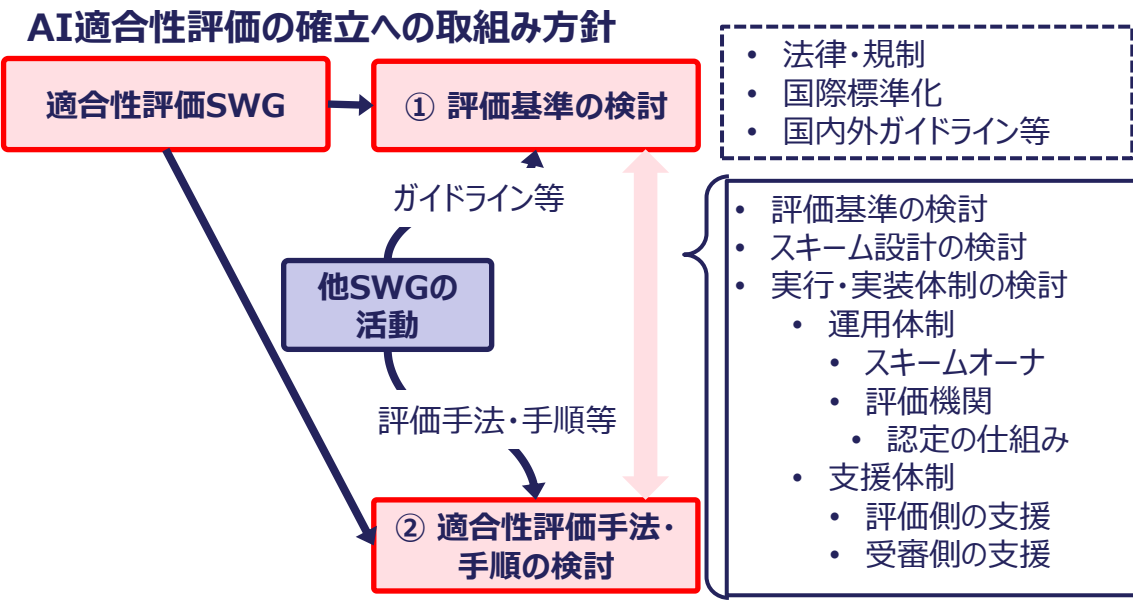
```

    graph LR
    A[調査・課題抽出] --> B[制度設計に向けた検討]
    B --> C[方法論・体制整備]
    C --> D[国際連携  
相互運用・相互承認]
  
```

➤ 多層的かつ包括的な評価方法の検討・開発

SWGのロードマップ

	短期的な取組み (令和7年度)	中期的な取組み (令和8年度～9年度)	長期的な取組み (将来的なビジョン)
	<ul style="list-style-type: none"> 分野別SWGと連携し、ニーズや受審組織の現状に関するヒアリング 適合性評価を業務とする機関を中心としたSWGを組成し、既存の適合性評価手法を分析 	<ul style="list-style-type: none"> 国際標準化議論を踏まえた、包括的なアシュアランスとアカウントビリティ確保等に係る適合性評価の検討 AIに関する適合性評価のあり方の具体化と試行により実効性を検証 	<ul style="list-style-type: none"> 多層的かつ包括的で、国際的に相互運用・相互承認可能なAI適合性評価制度の構築



- SWGの参加組織の活動も踏まえて、現状の適合性評価の取組について整理を行った。
- 国内の活動を軸にAIに関する取組状況について主要国の取組みとの関係を整理した。
- AIの標準化および適合性評価に関連する取り組みについて整理した。
- Human Machine Teaming (HMT) を題材にAI適合性評価の在り方を検討した。

適合性評価の現状の整理

国内におけるAIに関する
取組状況の整理

適合性評価SWGメンバー

公益財団法人日本適合性認定協会 (JAB)

一般社団法人情報マネジメントシステム認定センター
(ISMS-AC)

一般財団法人日本規格協会 (JSA)

独立行政法人製品評価技術基盤機構 (NITE)
認定センター

一般財団法人 日本品質保証機構 (JQA)

国立研究開発法人産業技術総合研究所 (AIST)

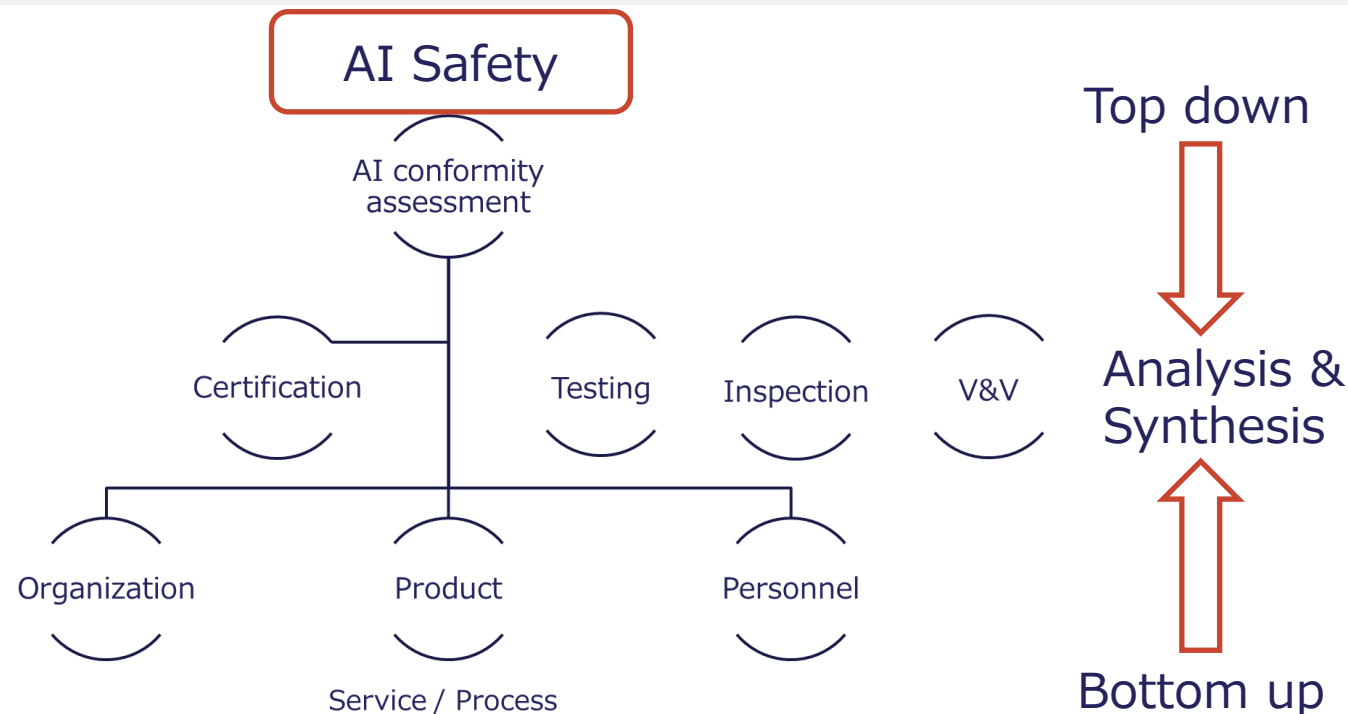
**Human Machine Teaming (HMT) を題材に
AI適合性評価の在り方を検討**

各参加組織における適合性評価に関する活動

- 適合性評価SWG参加者の所属組織では、適合性評価における認定機関としての活動、評価機関としての活動、AIに関する標準化活動など様々な活動が実施されている。

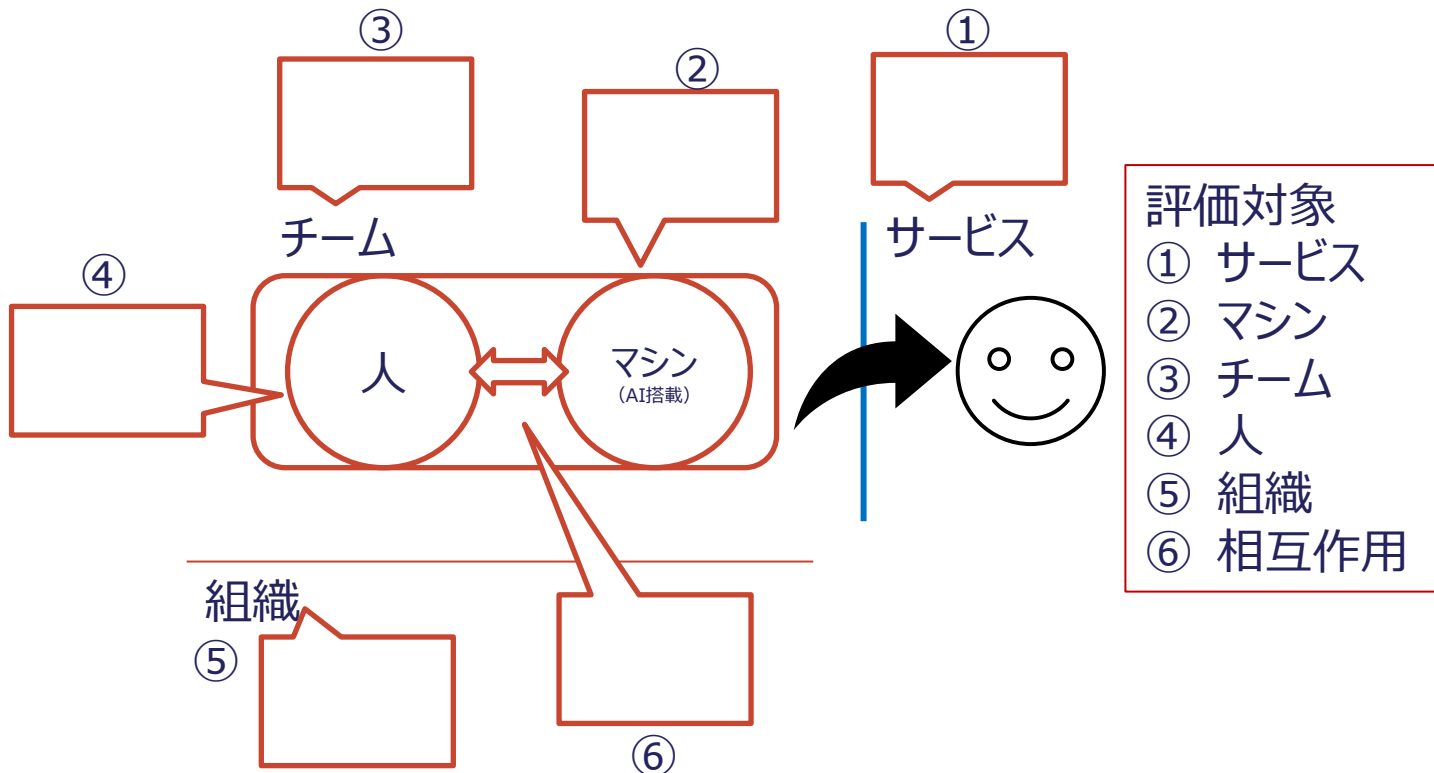
参加機関	適合性評価SWGとの関係	適合性評価SWGに関連する取組
公益財団法人日本適合性認定協会 (JAB)	国内におけるマネジメントシステム・製品・要員認証機関に関する主要な認定機関として参加	<ul style="list-style-type: none"> ISO 9001 (QMS) 認証、ISASecureのEDSA認証などのマネジメントシステムと製品の評価機関の認定
一般社団法人情報マネジメントシステム認定センター (ISMS-AC)	マネジメントシステム認証 (特にISMS・AIMS) の認定機関として参加	<ul style="list-style-type: none"> 2つの認証機関に対してAIMS認定 (2026年1月時点)
一般財団法人日本規格協会 (JSA)	ISO/CASCO等の適合性評価に関する国内最大級の規格開発機関として参加	<ul style="list-style-type: none"> ISO/CASCOをはじめとする国内の審議団体の運営
独立行政法人製品評価技術基盤機構 (NITE) 認定センター	国内における特に製品評価に関する認定機関として参加 (製品評価に関する適合性評価規格の開発も実施)	<ul style="list-style-type: none"> JC-STAR制度における試験機関の認定 日本認定機関協議会の事務局として国内の認定制度をリード
一般財団法人日本品質保証機構 (JQA)	サービスロボット、ドローン、サイバーセキュリティ等に関する国内最大級の適合性評価機関として参加	<ul style="list-style-type: none"> ISO/CASCOにおける国際標準化活動をリード (国内委員長) AIMS認証の審査サービスを開始
国立研究開発法人産業技術総合研究所 (AIST)	AI分野の国際標準化開発をリードしている国内最大級の研究機関として参加	<ul style="list-style-type: none"> ISO/IEC JTC 1/SC 42の国内委員会をリード (国内委員長) HMTに関する議論をけん引

- AI適合性評価には、多様な評価対象と各評価対象に対する評価手法の確立が必要。
- また、AI適合性評価の在り方や、多様な評価対象、評価手法を包括的に取り扱うための方法論とその実施に向けた関係機関との協働の在り方などを検討する必要がある。
- その他、審査側とAIサービス提供者（受審）側との双方向なコミュニケーションを踏まえて、国内の法律・ガイドラインとの対応、国際調和（相互運用・相互承認）等を考慮、柔軟な制度設計を検討する。
- 2025年度としては、AIセーフティ評価の部分としてのAI適合性評価の在り方についてHMTを題材に検討した。



- HMTは、人とAIが協力して目的達成（サービス提供）に向けて取り組むものである。
- HMTを題材にAI適合性評価を検討する場合、AIだけでなく、人間、AIと人間の協働関係、サポートする組織など様々な評価対象が存在し、それら进行评估するにあたり各種課題が存在する。
- 2025年度の適合性評価SWGでは、HMTにおける評価対象を6点に整理して議論を行った。
- 各評価対象において、評価すべき観点と課題について整理した。

HMTにおいて検討される評価対象



何故、HMTを題材にするのか

- 評価対象が複数存在
- 評価手法も異なる
- サービスを評価対象としたときの適合性評価をどうすべきか



複数の適合性評価の組合せが必要
⇒ 包括的なAI適合性評価に通じる

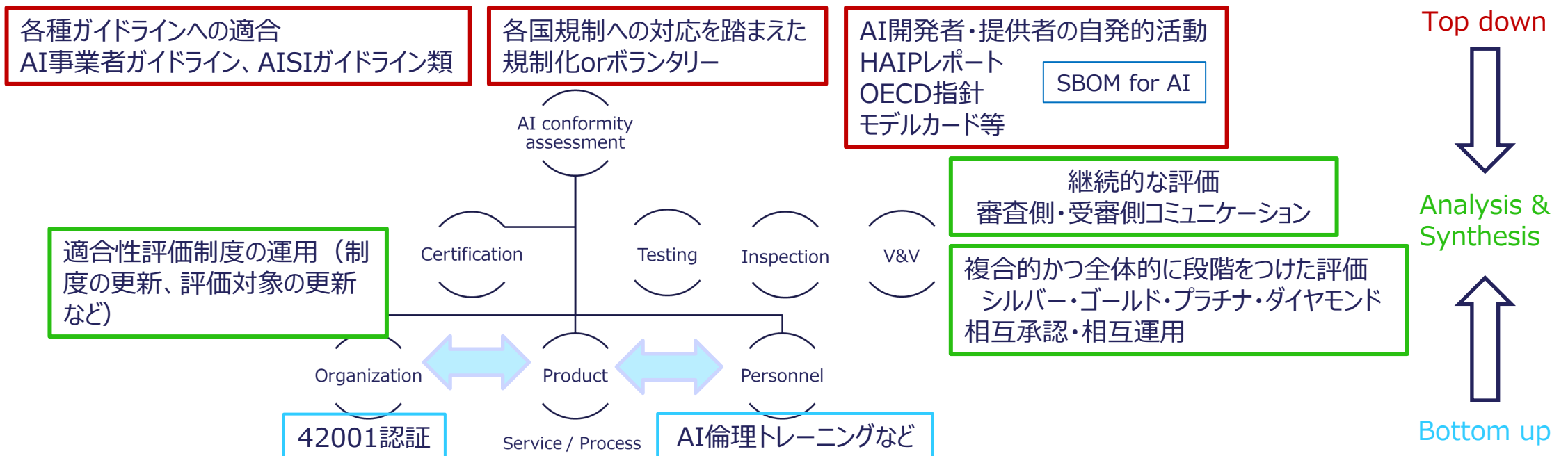


- 全体を通して、エンドユーザーに提供するアウトプットのセーフティ（安全性・信頼性等）を保つことが重要であるという意見が多くあった。
- そのため、HMTを踏まえた評価では、「①サービス」のセーフティを評価するうえで、②～⑥の評価を実施するという整理になると考えられる。
- 一方で、整理した6つの評価対象を全て評価する必要がないという意見も確認された。特に「③チーム」や「⑥相互作用」に関しては明確な評価は必要ではないという意見があると同時に、「⑤組織」において重要視されている評価観点と類似していることから、「⑤組織」の観点に「③チーム」や「⑥相互作用」を含めることも一案だと考えられる。
- また、現行の「ISO/IEC 42001」は、「③チーム」、「④人」、「⑤組織」、「⑥相互作用」を全体的に含められているという意見もあり、今後は「②マシン」の評価ができる認証と連携することが重要だと考えられる。加えて、「④人」に関しては、適合性評価ではない方針も検討できるという意見があった。
- 現在の意見を取りまとめると、
HMTにおける「①サービス」の評価には、「ISO/IEC 42001」における「③チーム」、「⑥相互作用」を含む「⑤組織」の評価に加えて、「②マシン」の評価、「④人」の評価を連携したスキームが必要
という考えが一案だと考えられる。

2026年度に向けた活動方針

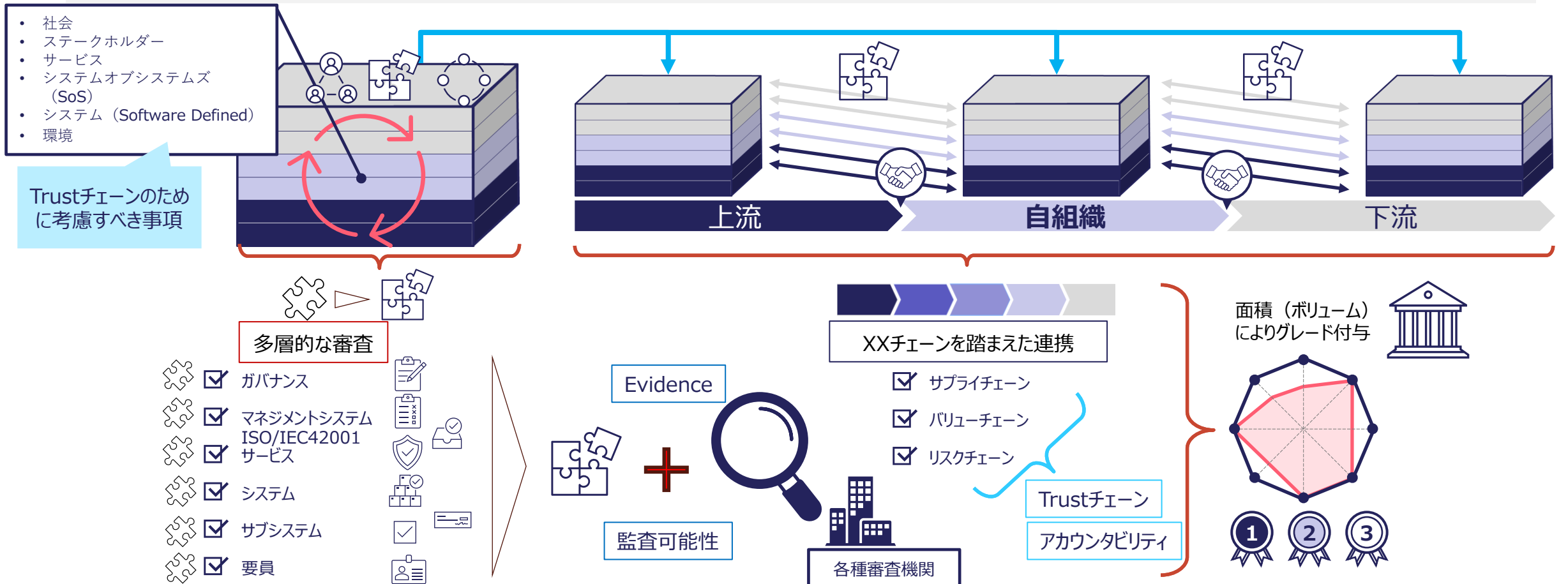
- AI適合性評価の制度設計には、評価側と受審側の継続的なコミュニケーションが不可欠であり、2025年度のメンバーに加えて、適合性評価機関や受審側組織に拡大して進めていく予定である。
 - 評価側としては、AIサービスのライフサイクルを通じて継続的に評価できるAI適合性評価手法の開発を目指すことが望まれる。
 - 受審側としては、自発的なAIセーフティに関連する活動（HAIPレポート、OECDのガイドライン等への準拠、AI事業者ガイドラインやAISIGガイドライン等への準拠とそれらの証跡の確保）も重要となる。
- 2026年度では、評価側・受審側の両方の意見を踏まえて、適切な制度設計を検討していく。

今後の活動：包括的なAI適合性評価制度の構築に向けて、各種適合性評価手法をモジュールとして組み合わせる方法論の確立へ



目指していくAI適合性評価の姿

- AI適合性評価のあるべき姿としては、組織内の評価のみならず、組織間（Trustチェーン：サプライチェーン、バリューチェーン等）についても考慮した包括的な評価が実施できる仕組みを目指す
 - 組織内の多層的な評価を組織間の関係性も含め総合的に評価する
 - 相互運用、相互承認を含めて、実現可能な制度設計を提案する



AISI

Japan AI Safety Institute